

山口西田読書会（第 195 回）2019 年 4 月 14 日
第 194 回（平成 31 年 4 月 7 日開催）の Protokol

1. テキスト

本日より「内部知覚について」に入る。冒頭 76 頁から 78 頁後ろから 5 行目まで

2. テキスト要約

「内部知覚について」は大正 13 (1924) 年 3 月、9 月、10 月に発表された論文である。マイノングの「我々の知識の経験的基礎について」における「内部知覚」をもとに西田の内部知覚論を展開したものである。マイノング (Alexius Meinong, 1853-1920) はオーストリアの哲学者、心理学者。オーストリアで実験心理学を始めた人でもある。哲学者としては「対象論」（「存在しない対象が存在する」）で名高い。ここでも西田は表向きマイノングの「内部知覚」を論じているが、自らの「内部知覚」すなわち「純粹経験」に引き付けて論じていることに注意が必要である。

マイノングによれば「真の経験」は「直接経験」であり、これは「知覚」であるという。そうしてこの知覚によって実在が把握される。何故なら知覚は「明白」だからである。何故「明白」かと言えば「知る者と知られる物」が「合一」するからである。この「合一」は「表象と判断の結合」とも呼ばれているが、これは『善の研究』で「純粹経験（直接経験）」について「意識現象についての知（『善の研究』第 2 編第 1 章第 3 段落）」と呼ばれたものに他ならない。「意識現象」が「表象」で、「知」が「判断」しかも「直接の判断」（同第 5 段落）である。

ところが『善の研究』で「純粹経験」が「事実と認識の間に一合の間隙がない。真に疑うに疑いようがない（同第 3 段落）」と言われていたのに対し、「内部知覚」でも「知覚する者と知覚される物との厳密なる合一は望まれない」とされていることが我々の注意を引く。表象（意識現象）と判断が「直接」しているのではなく「直接の継続」に過ぎないというのである。「記憶」についての判断は不確かであり、「推量的明証」にしか達しない。同様に「現在」はそれを捉えようとするすでに過去に属するのであるから、「内部知覚の明白」も記憶同様に「推量的明証（明白）」にしか達しない、ということになる。したがって過去を現在にどこまでも近づける「現在の極限」において「確実」は「極限」に達し「明白」となる、としか言えないことになる。

「知覚」には物の存在を知る（存在判断）「外部知覚」と実在の性質を知る「内部知覚」とがある。「外部知覚」は物の「本体的性質」を知ることはできないが、「内部知覚」が「現在の極限」から始まって次第に「想像」に近づいて行くと考えれば、「外部知覚」もその線で「推量的明証」を持つということができることになる、と西田は言う。

こうなると「知覚」は「内部」「外部」を問わず「現在の極限」を離れることによって「積極的」に「対象」をもつ「存在判断」ということになる。こうして「知覚」は「物理的世界の基礎」となり得るが、こうした「客観界」を与える「知覚」は単に「表象と判断の結合」つまり「内部知覚」であってはならないというのが西田の主張である。「現在の極限」を離れ「積極的」な対象を持つためには、知覚という作用を意識する「意志の自覚」がなければならない、というのである。そうして「意志（行為）の自覚」において「明白」の感情が伴うとされる。では「意志の自覚」とは何か。そうして何故それが明白の感情を伴うのか。

ここで西田はデカルトの「私は考える、故に私がある」を持ち出す。「考える私」を対象化してこれを「ある」と判断してもどこまでも推量的でしかない。「考える私」がすでに「考えられた私」になっているからである。こうした反省のやり方ではどこまで行っても「考える私」に到達することはできない。ここで転換が起こる。「考える私」を反省する刹那、そこに後ろからすでに「考える私」がこうした反省する我を包んでいる、そのことに気付く。このように我を包む「我」、これが「私がある」と言われる場合の「私」であり、それを「ある」とするのは反省ではなく、直観である。

西田は「cogito ergo sum」を「一種の知即行、行即知なる自覚の意識」と呼んでいるが、「知」とは直観（自覚）、行とは反省（知覚）のことであると考えられる。そうして「芸術の世界」に話題が移り、そこにおいて「一種の明白の感を有するの、作ることが見る

ことであるが故と考えることができる」とされる。

ところで『善の研究』でもデカルトの「*cogito ergo sum*」について、一方でそれが推理である限りにおいて、「直接経験の事実」ではなく、また推理によって「物の本体」を知り得るとしている点で「独断」としながら、他方で推理でない限りにおいて「実在と思惟との合一せる直覚的确实を言い表したものとすれば、余の出立点と同一となる」と言っていた。ここでの「*cogito ergo sum*」理解が「内部知覚について」における理解と同一であるとするならば、『善の研究』における「純粹経験」はすでに反省に窮する所に成立する自覚ないし直観の立場に立っていたことになる。そうしてまさに『善の研究』で西田はかかる立場に立ち得ていたのであり、それが「純粹経験の立場」の最終的な到達点であり、それを導いたのが「宗教的覚悟」であるというのが筆者の考えである。

3. 哲学的問い

「真の自由とは何か」